

「英語嫌い」への音読実践

神 谷 奈 緒

I Am Not Good at English, but Reading Aloud Is Fun: A Practical Report of Reading Aloud

KAMIYA Nao

【キーワード】英語嫌い、音読、成功体験

はじめに

本学で英語の授業を担当し始めてから8年目となるが、この2～3年は授業内に音読を取り入れている。音読活動を始めた背景、実践、そして学生達の変化について述べたい。

1. 「英語嫌い」の学生達

本学の学生達に見られる全体的な傾向として、この8年間で変化してきた事と変わらない事がある。変化を感じられるのは授業に対する姿勢だ。最初の2年間は、教室に筆記用具を持参しない、授業中に私語をやめない、一見授業に参加しているようでも実は殆ど何も聞いていない、当ても「わかりません」と言うだけ、というような学生がどの授業にも少なからず存在した。それが、3年目にコロナ禍のもとで1年間のオンライン授業を経て学校に戻ってきた学生達は、彼らなりに意思を持って授業に参加するようになったのだ。これは授業する側にとっては大変嬉しい変化である。

一方、変わらないのは英語に対して苦手意識を持つ学生が多いという事である。恐らく中学校のかなり早い段階で英語につまずき、わからないまま授業が進んで行くうちにどんどん英語に対する苦手意識が強くなっていき、気づけば「英語嫌い」になっていた…と見受けられる学生のなんと多い事か。有り体に言えば、本学の学生の殆どはこのような「英語嫌い」である。

埼玉大学の及川賢は991名の中学2年生に「小学校6年生・中学校1年生の時にそれぞれ英語の授業が好きだったか」というアンケートを実施した。「好き→嫌い」に変化した生徒は全体の12.3% (122人) だった。更に、小6時に英語が好きだったのが中1になって嫌いになった理由を22項目の質問に回答する事で探った。この結果からわかったのは、子ども達が中学校に入って英語を嫌いになった原因は授業形態の変化、すなわち、歌やゲーム中心の授業から教科書を用いた「教科」らしい授業への変化、にではなく、英語そのものが不得意だったり苦手だったりする事にある、という事実である。(及川 2024) 及川はこの結果を受け、生徒を英語嫌いにしないためには歌やゲームを増やすのではなく、英語が得意だと生徒自身が感じられるようにしてあげる事が必要だと指摘する。この点は日々多くの「英語嫌い」に接している筆者も同意するところ

ある。どんなに英語に対して拒否反応を示していた学生でも、「できた!」「わかった!」という体験をすると目が輝く。そして、このような成功体験を毎授業積み重ねていくうちに「英語は思っていた程難しいものではないかもしれない」「自分にもできるかもしれない」と感じるようになっていく。学生がこう感じられるように授業を組み立て実践するのが教員に求められているもっとも大切な点であると痛感している。

そもそも、前述したようにコロナ禍以降多くの学生達には明らかな意識の変化が見られる。この変化は本学に限った事ではないようで、日本国際学園大学の卯城祐司も自身が担当する学生達は自分がまだ英語ができないことも、やらなければならないことも自覚しているが、どこから始めたら良いのかわからず、勉強による成功体験もないと指摘する。(卯城 2024) この卯城の言葉は示唆に富んでいる。英語の勉強をどこから始めたら良いかわからない学生達に明確な指針を示し、具体的な学習法を紹介し、一緒に実践して効果を体感させる。この成功体験を毎授業積み重ねて行く。これに有効な手段として筆者が選んだのが音読である。

2. なぜ、「英語嫌い」でも音読によって成功体験を実感できるのか

第一に、音読は英語の文字を読む＝インプットだけではなく、それを自らの声で再生する＝アウトプットするという「能動的」な学習活動である。同じ読む活動でも黙読だけでは学生自身どこが読めてどこは読めないのかを自覚しにくい。教員側からすると、どの学生が能動的に読んでいてどの学生は受け身の姿勢で読んでいる「風」なだけなのかわかりにくい。音読すればこれらが両者にとって明確になる。また、文字を黙って読むと眠くなるという学生も、自分で能動的に声を出さなくてはならない音読では眠くなっているヒマがない。

第二に、音読は同じくアウトプット活動であるスピーキングに比べ、特に「英語嫌い」の学生にとってはハードルが低い学習活動であると言える。スピーキングは自分で話す内容を考え、必要な語彙と文法を駆使して英文を作り、更にそれをアウトプットするという活動だ。対して音読は既に出来上がっている文を読むので、自分で文を作る必要がない。よって、作文するのに使うエネルギーを音声のアウトプットに充てる事ができる。他人が作った文をアウトプットする事でも、その文に使用されている語彙や文法事項を習得する事は可能だ。白井泰弘は、アウトプットと自動化について述べている。ゆっくりなら英語で文が作れる場合、アウトプットによって自分が持っている知識をより迅速に繋げられるようになる、すなわち知識の自動化が可能になるという。(白井 2012)

第三に、多くの「英語嫌い」の学生は英語の文字よりも音の方がとっつきやすいと感じているようだ。彼らは英語の文字を黙読する事は嫌いでも、声に出して読む事は面白く感じるらしい。これが、英語が得意だと自負する学生だと反転するのが興味深い。彼らの多くは中学高校と文字媒体主体の英語学習を経験して来ているため、英語の文字に比べて音に対する苦手意識を抱えている。しかし、元々英語を学ぶ事が好きなこれらの学生達は、音読のコツを掴んで更にその効果を実感するにつれて熱心に貪欲に音読活動に取り組むようになる。このように、音読は英語が苦手な学生にも得意な学生にも比較的取り組みやすい学習活動であると言える。

3. 具体的な実践方法

では、具体的にどのように音読活動を授業に組み込んでいるかについて述べていく。

音読を実践した、或いは実践中の直近の授業は以下となる：2025年春学期は基礎英語1、試験

英語 3、AER&W 1、同年秋学期は基礎英語 2、試験英語 2、試験英語 4、AER&W 1。

これら全ての授業における音読活動に共通しているのは、次の 5 点だ：授業最後に個人ワークとして行う、学生は一人一人筆者のところへ来て音読し、筆者はそれに対する個別フィードバックを与える、英文の意味よりも英語の音に重点を置いて音読する、音源を聞いた上でなるべく真似して音読する、音読する目的を明確にする。ひとつずつ解説しよう。

3.1 個人ワークとしての音読活動と個別フィードバック

音読活動はあくまでも授業の一部であり、授業の目的そのものではなく、各講義の目標を達成する為の一手段である。各講義および、それらの授業内で音読を実践した際に期待される効果を表にまとめると以下ようになる。

表 1 【講義の目標と音読により期待される効果】

	講義目標	音読効果
基礎英語	英語 4 技能の習得	読んでも聞いてもわかる語彙、文法、構文の強化
試験英語	英検やTOEICのリスニング力強化	リスニング力の強化
AER&W 1	聴解力・読解力の習得	リスニング力の強化 スピーキング力の基礎構築

音読活動を一齐授業形態ではなく個人ワークとして行う理由は三つある。まず、多くの学生は自分の発音に自信がなくクラスメートの前では音読したがない。それが筆者と一対一になると最初は聞き取れない程小さい声で音読していた学生も、回数を重ねるにつれて段々自信を持って読むようになっていく。第二に、音読の得手不得手、また、不得手の原因は個々の学生により異なるため、一齐に音読していたのではどの学生がどこでなぜ躓いているかを把握するのは難しい。最後に、これは二つ目の理由と密接に関連しているのであるが、個人ワークとして音読活動を行う事によって個々の学生のプロファイルがわかり、個別フィードバックが可能になる。一人一人の学生が躓いている箇所とその対応策をフィードバックする事で彼らは効率的効果的に自分の音読を調整する事ができる。その結果、どの学生の音読も例外なく良くなっていく。それをピンポイントで指摘し、学生が達成感を味わえるようにするのも個別フィードバックの重要な目的である。この繰り返して学生達は次第に能動的に学習活動に参加するようになる。岐阜県立恵那南高等学校教諭の山川真弘は、わずか1分半の個別フィードバックでも生徒に自分が「授業の担い手」だという意識を育む事ができると述べている。(山川 2025)

3.2 音に重点を置いた音読活動

さて、このように個々で実践する音読では、なぜ文の意味よりも音にフォーカスさせるのか。それは、いずれの授業でも学生達が音読する文は「文字で読めば理解できるが、音で聞くとわからない」レベルのものを選んでからである。1989年の学習指導要領改訂に伴い1994年に「オーラル・コミュニケーション」(現在は学校により、「英語コミュニケーション」などの名称に変更されている)が導入されたとはいえ、日本の中学高校での英語教育は依然として音よりも文字に重きが置かれている。中高 6 年間熱心に英語の授業を受けて来た「英語好き」な学生ですら、リ

スニングに対する苦手意識が強いのだ。ましてや、「英語嫌い」の学生が英文を聞いて理解できなくとも何の不思議もない。読んで意味がわかる文は聞いても理解できるようになるという事は、学生にとって実感しやすい成功体験となる。

3.3 音源を真似する音読

文を聞いて理解できるリスニング力をつけるには、自己流で音読しても意味がない。音源を聞いた上で、それをなるべくそっくりに真似て音読する練習を積み重ねる過程で英語特有のリズム、イントネーション、発音が脳にインプットされていく。そして、インプットしたこれらの情報をリスニングに活かす事が可能になるのだ。各授業で使用する教科書は、リスニング問題だけではなくリーディング素材や単語も音声聞けるようになっている。この音声をクラス全体や学生個々人で聞き、できるだけ真似る事を意識して音読する。具体的には、一文ずつ後についてリピートする、一段落を繰り返し聞いて音読する、音源に被せて一緒に音読するといった音読活動を実践している。これらの活動には統一された名称があるわけではないが、ここでは安木真一（2022）に倣ってそれぞれ「リッスン・アンド・リピート」「バズ・リーディング」「オーバーラッピング」と呼ぶ。（安木 2022）

3.4 音読する目的の明確化

表1に示されているように、いずれの授業でも音読活動によりリスニング力の強化が期待される。学生には、「自分で出せない音は聞けない。だから、リスニング力をつけたければ耳で聞くだけではなく、耳で聞いた音を自分で再生する方が早道だよ」と毎回のように伝えている。目的を意識して音読するのと、ただ言われたからやる、というのでは得られる効果が違う。神奈川県川崎市立川崎中学校教諭の井上百代は、授業における学習活動の目的がわかると、生徒の活動意欲がぐんと高まると述べている。（井上 2025）AER&W 1では、音読活動によってスピーキング力の基礎が構築される効果も狙っている。これは、同じ英文を繰り返し音読する事でその文に用いられている語彙や構文が正しい音で「自動化」され、元の文を応用して自分の事を話せるようになるからだ。

4. 音読の効果と今後の展望

毎回の授業で各自音源を聞き、それを真似して音読し、フィードバックをもらう。これを繰り返すうちに、どの学生も自らの変化を実感し自信をつけていくのが手に取るようになった。自信がついてきた「英語嫌い」の学生達は一斉授業にも積極的に参加するようになった。これは嬉しい副産物であった。結果、クラス全体として読解力、聴解力ともに向上した。前期に引き続き後期の授業でも音読活動を継続しているが、今後は文字でインプットした文を見ないで自分で再生する「リード・アンド・ルック・アップ」、文字を見ずに聞いた音声に少し遅れて追っかけ再生する「シャドウイング」（安木 2022）と活動の難易度を上げて行く事を密かに計画している。「難しいけど面白い！」と楽しそうに音読するかつての「英語嫌い」の彼らなら、これらの上級音読活動にも果敢に挑んでいくであろう。

参考文献

井上百代「授業のコントロールを手放し生徒に学びをゆだねようとする私の奮闘記」

『英語教育』第74巻、1号、40-41頁、2025年

卯城祐司「今日も授業がうまく行きません」『英語教育』第73巻、11号、26-27頁、2024年

及川 賢「小学校で英語が好きだった自動は中学校で英語が嫌いになるのか」

『英語教育』第73巻、11号、28-29頁、2024年

白井恭弘『英語教師のための第二言語習得論入門』第10刷、大修館書店、2021年

安木真一『スピーキング力に差がつく！英語アクティブ音読超指導法』第1刷、明治図書出版、
2022年

山川真弘「英語科の授業で個別最適な学びに足場架けを－教室内の多様性を尊重した指導を目指して」『英語教育』第74巻、1号、36-37頁、2025年